

Wasada Ichi

埴田市遺跡Ⅲ

七瀬川河川改修工事に伴う

発掘調査概報

1990

大分県教育委員会



植田市遺跡全景

例 言

1. 本書は、平成元年度に発掘調査を実施した七瀬川河川改修工事に伴う蘆田市遺跡の埋蔵文化財発掘調査概要報告である。
2. 発掘調査は、建設省九州地方建設局大分工事事務所の委託事業として大分県教育委員会が実施した。
3. 調査団の構成は以下の通りである。

調査委員 渡辺澄夫（別府大学教授） 賀川光夫（別府大学教授）
近藤高一（山口大学教授） 豊田寛三（大分大学教授）
後藤正二（県文化課長） 後藤宗俊（県文化課課長補佐）

調査主任 渋谷忠章（県文化課埋蔵文化財第二係長）

調査員 高橋徹（同 主査） 村上久和（同 主査）
西哲弘（同 第一係主任） 吉田寛（同 第二係主事）
今泉正子（同 囑託） 清原史代（同）
永松みゆき（同）

調査補助員 守田隆彦（同志社大学学生） 白木守（別府大学学生）
橋本一彦（別府大学学生）

作業員 中津留ヨネ子・吉野岩子・古後秀子・愛甲須磨子・関美恵子・関則子・安東
房子・甲斐千和子・谷口マツエ・佐藤千代美・宮川千懸・森吸子・水口久美
子・松尾キミ子・和氣昌子・柳井ゆき子・山口カヨ子・伊藤文子・多志賀志
津子・池田滝子・工藤直子・衛藤龍子・日野美紀・児玉恵美子・福岡悦子・
渡辺知子・安東孝子・大嶋まり子・福岡光子
小村美儀・小城晃宏（以上別府大学学生）・河崎真也（立正大学学生）・後
藤聡（福岡大学学生）

その他、遺構の実測について浜田学（別府大学学生）の援助を得た。

上記の他、中村友博氏（山口大学助教授）・石野博信氏（奈良県立橿原考古学研究所副
所長）・佐藤興治氏・玉永光洋氏（以上大分市立歴史資料館）・飯沼賢司氏（大分県立宇
佐風土記の丘歴史民俗資料館）・坪根伸也氏・河野史郎氏（以上大分市教育委員会）など
の視察と助言を得た。

4. 本書で使用した航空写真は、朝日航空株式会社撮影による。
5. 本書の編集・執筆は、吉田寛が行った。なお、トレースには永松みゆき・今泉正子・姫野
和子（県文化課囑託）の援助を得た。

目 次

I. はじめに	1
II. 89年度調査の概要	3
(1) 調査の概要	3
(2) C区の調査	7
(3) D区の調査	19
III. まとめと今後の課題	20
(1) 古墳時代の流路について	20
(2) 中世館（屋敷地）跡について	21
(3) 古墳時代前期の遺構と関連する問題	22

図 版 目 次

Fig. 1 植田市遺跡周辺遺跡分布図	2
Fig. 2 周辺地形図	4
Fig. 3 調査区全体図	5・6
Fig. 4 16号溝出土陶磁器	7
Fig. 5 館（屋敷地）の溝出土遺物	8
Fig. 6 中世館（屋敷地）跡全体図	9・10
Fig. 7 溝II出土遺物	12
Fig. 8 流路出土遺物	14
Fig. 9 流路出土ミニチュア土器	14
Fig. 10 溝I出土勾玉	16
Fig. 11 溝III・溝I出土遺物	17
Fig. 12 B区溝I出土遺物	18
Fig. 13 流路出土須恵器	19
Fig. 14 D区全体図	19
Fig. 15 中世館（屋敷地）の大きさ比較	21

I はじめに

植田市遺跡は、大分市大字市に所在し、大分川の支流である七瀬川流域左岸の沖積低地に位置する。この一帯は植田条里遺跡として周知されているが、その範囲が広範に及ぶことから、調査区を新たに植田市遺跡と命名している。

植田市遺跡の南側では、七瀬川が大きくS字状に屈曲しており、このため1953年6月の大洪水では大きな被害を受けた。現在の河道も危険な状態にあり、洪水の再発は免れない状況にある。また近年、七瀬川沿岸周辺は大規模住宅団地の開発や田畑の住宅化が急激に進行しており、人口及び資産の増大が進んでいる。このため、これらの地域の安全性の向上をはかるため、ショート=カット工法による「七瀬川市捷水路工事」の早期着工が早急に望まれるようになった。こうしたことから、1987年3月に建設省大分工事事務所より、工事の実施計画について正式な説明と発掘調査の依頼があり、同年6月より工事の進捗状況に合わせて順次調査を実施することとなった。

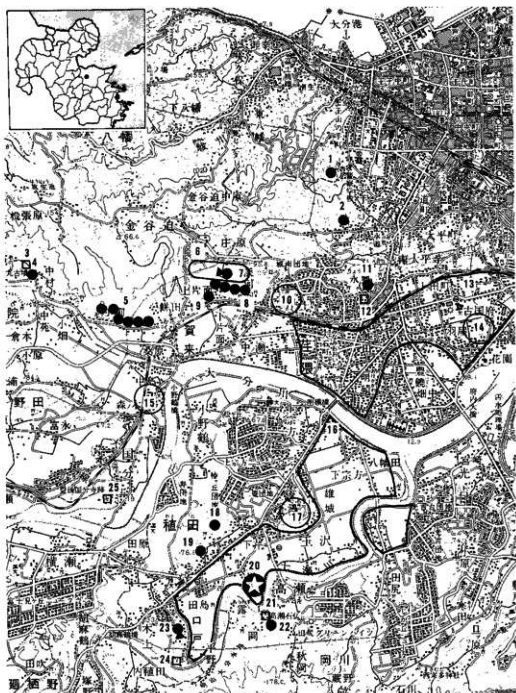
七瀬川河川改修に伴う全体対象地は、工事計画に基づき、幅90m、延長685mの約61,650㎡となる。昨年度までの調査で、約8,500㎡を発掘し、縄文時代晩期終末の遺物・古墳時代前期の溝・古墳時代中期の住居跡、土坑・古墳時代後期の流路・中世館（屋敷地）跡と柱穴群・江戸時代の溝や井戸等が検出され、植田市遺跡が大規模な複合遺跡であることが判明した⁽¹⁾。本年度は、昨年C区と仮称していた地区の掘り下げと拡張を目的として、1989年5月から1990年2月まで調査を行った。その結果、中世館（屋敷地）跡の南辺溝を発見すると共に、中世の遺構面の下層に一昨年度検出した古墳時代前期の溝及び古墳時代後期の流路の延長部を確認できた。また新たに19世紀前半前後の石組み溝や5世紀後半代の溝なども検出した。C区の遺構の掘り下げをほぼ終了した後、C区の北側をD区と仮称し、重機による表土剥ぎを行ったところ、やはり古墳時代後期の流路の延長部を確認し、余力があったのでこの地区の遺構の掘り下げも行った。以上の地区の遺構の掘込みがほぼ完了した1990年2月2日、ヘリコプターによる空撮を行った。その後、遺構の希薄な部分にダメ押しのトレンチをいれ、来年度以降の調査の準備とした。そして1990年2月中旬には、本年度の現場での作業をすべて終了した。

本年度の調査面積は、C区とD区の合計約9,800㎡である。ただしこの内約2,500㎡は昨年度の調査の下層部分の面積となるので、新たに拡張した面積は約7,300㎡となる。

註(1) 植田市遺跡の1987年度、1988年度の調査の概要及び遺跡の位置と環境については、以下の文献参照。

渋谷忠章・吉田寛編『植田市遺跡』I (大分県教育委員会 1988年)

同上『植田市遺跡』II (大分県教育委員会 1989年)



- | | | | | |
|-----------|-----------|------------|-----------|------------|
| 1. 亀甲山古墳 | 2. 古高古墳 | 3. 宮死遺跡 | 4. 千代丸古墳 | 5. 餅田古墳 |
| 6. 庄ノ原遺跡 | 7. 蓬来山古墳 | 8. 川崎古墳群 | 9. 丑殿古墳 | 10. 尼ヶ城遺跡 |
| 11. 弘法穴古墳 | 12. 永興寺 | 13. 古園府桑里跡 | 14. 園府推定地 | 15. 賀来中学遺跡 |
| 16. 藤田桑里跡 | 17. 雄城台遺跡 | 18. 下ヶ迫古墳 | 19. 世利門古墳 | 20. 植田市遺跡 |
| 21. 高瀬石仏 | 22. 高瀬横穴群 | 23. 御陵古墳 | 24. 口尸石仏 | 25. 豊後園分寺 |

Fig. 1 植田市遺跡周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)

II. 89年度調査の概要

(1) 調査の概要

本年度の調査は、昨年度設定したC区の掘り下げと拡張を行い、加えて新たにD区を設定し、遺構の掘り込みを行った。これらの調査成果を概括し、代表的な遺構・遺物を紹介したい。

C区 昨年度約2,500㎡の調査を行い、中世館（屋敷地）跡の存在を確認していた地区である。昨年度のトレンチ調査で、この遺構面の下層にさらに古い時期の遺構を確認していたため、重機による掘り下げを行い、加えて北・南・東側に調査区を拡張した。調査総面積は約9,500㎡におよび、幕末から古墳時代前期に比定される様々な時期の遺構を確認した。この地区の遺構は調査区北側に集中し、南側は土器細片を多く含む包含層となる。

遺跡の層位は、全体が南方向の川方に向かって傾斜している。中世以前の遺構検出面は北側が黄褐色粘質土、南側が暗褐色粘質土となり、層位的には前者が上位、後者が下位になる。黄褐色粘質土は調査区中央付近で途切れ、また調査区東側では近世の削平によって、消失している。包含層に設定したトレンチ調査によると、暗褐色粘質土も溝Ⅰの南側で急速に傾斜し、上位に古墳時代および中世の包含層を乗せる。暗褐色粘質土の下位は、この遺跡の基盤層である青灰色シルト層となる。今回は時間と紙幅の制限により、土層断面図を提示できていない。詳細は正式報告に期したい。なお包含層の土層断面による観察では、鉄分の沈着を認める層もあり、水田層の一部である可能性もあるが、今のところ明確な畦畔などを確認し得ていない。

次に、検出した遺構の概要を簡単に紹介する。

近世以降 3条の溝を確認している。15号溝は18世紀代、16号溝は19世紀前半前後、17号溝はそれ以降に比定される可能性が大きい。16・17号溝は石組みと枕を持つ溝で、その内部からは多くの陶磁器などが出土している。

中世 昨年度までの調査で15世紀後半から16世紀前半前後に比定される館（屋敷地）跡の存在を確認していた。本年度の調査区の拡張によって、館（屋敷地）の南辺溝と南東コーナーを検出し、中世館（屋敷地）が一辺約60mの方形に巡る溝を持つ遺構であることが明らかになった。また今回の掘り下げによって、館の存続時期より明らかに先行する古い時期の柱穴群や井戸、土坑の存在を認めているが、いまだ個々の詳細な検討を行っていない。このうちC区3号井戸の埋土中からは、中国産の口禿げ白磁の口縁部小片が出土しており、14世紀以降に比定される可能性が高い。

古墳時代中期・後期 7世紀前半前後に比定される流路と溝Ⅴ、5世紀後半代に比定される溝Ⅱを検出している。このうち流路は、一昨年の調査以来検出していた遺構の延長部であるが、今回の調査で埋土中より5世紀後半から7世紀中葉前後の須恵器が出土し、約150年にわたって機能していたと解釈するのが妥当であると考えに至った。これについては、後述する。

また溝Ⅴの埋土からは多数の流木が出土し、洪水による埋積の状況を示している。木片の中には加工痕のあるものも認められる。溝Ⅱでは埋土上位から土師器甕・高坏、中位からミニチュア土器が出土している。

古墳時代前期 一昨年度、弥生流路として報告した遺構の延長部である。その後の検討で、遺構はかなり整備された二段掘りの断面形を呈し、遺物もほとんどが古墳時代前期初頭から前半前後に位置づけられることがわかったため、今回遺構の名称を代え、溝Ⅰとして報告する。溝の埋土中からは、古式土師器や勾玉などが出土している。溝Ⅰに接続する溝Ⅲも該期に比定される。

その他、弥生時代中期に比定される可能性のあるものとして、C区2号土坑があげられる。西側の中世館（屋敷地）跡の溝によって切断されているが、埋土中より下城式土器の甕の口縁部の破片が出土している。

D区 本年度新たに設定した地区で、調査面積は約300m²である。出土遺物が僅少でそれぞれの遺構の詳細な時期を決定できないが、古墳時代の流路以外の遺構は、中世の所産と思われる。この地区でも古墳時代の流路の延長部が検出され、埋土上位から7世紀中葉前後に比定される須恵器が出土した。流路の最終埋没時期を考える上で、示唆的な遺物である。

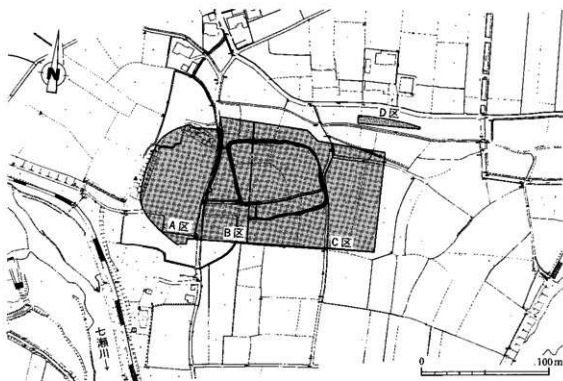


Fig. 2 周辺地形図 (S=1/3,000)

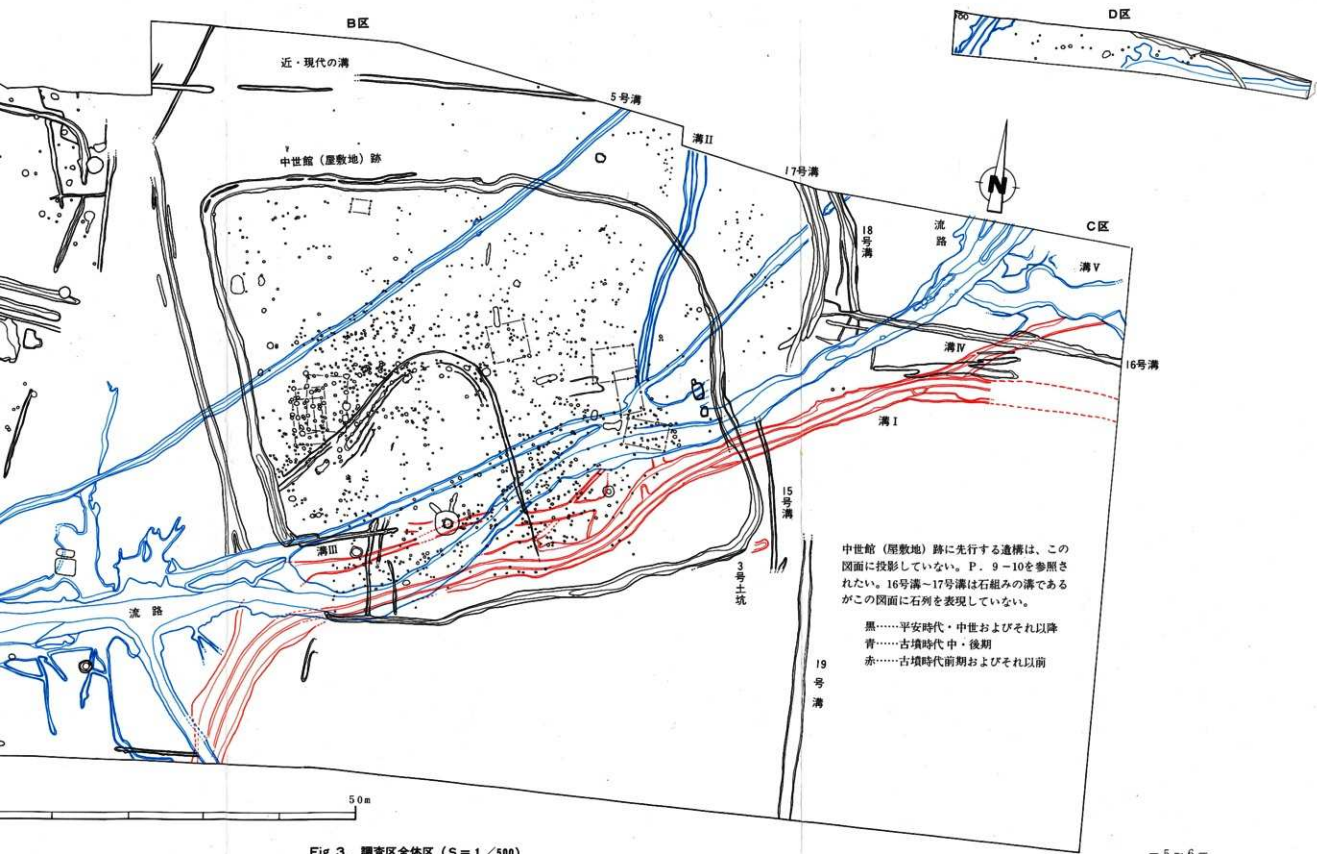


Fig. 3. 調査区全体区 (S=1/500)



Fig. 3. 調査区全体区 (S=1/500)

(2) C区の調査

①江戸時代の遺構・遺物

C区で検出した江戸時代の遺構は、18世紀代に比定される素掘りの溝1条（15号溝）と19世紀前半前後およびそれ以降に比定される石組み溝2条である。

16号溝と17号溝は、調査区の北東部に位置する石組みと杭を有する溝である。16号溝の掘り方上面幅は1.5m、深さ40cm、石組みの幅0.4m、17号溝の掘り方上面幅は2.2m、深さ80cm、石組みの幅0.5mを測る。これら2条の溝はT字形に交差しており、区画の一部を形作っている。溝の構造は一昨年度調査した1号溝に類似しているが、つくりはかなり荒いものである。埋土中には多量の陶磁器（Fig. 4）を含み、さらに16号溝からは煙管の雁首や寛永通寶も出土している。

註 (1) 『植田市遺跡』I（大分県教育委員会 1988年）8頁

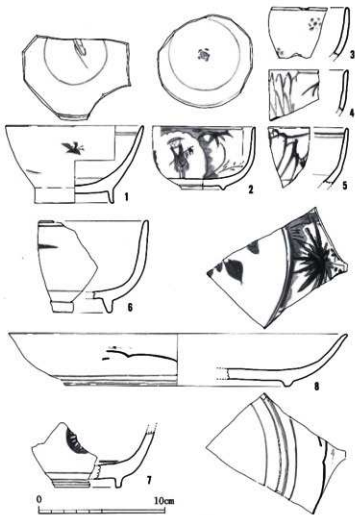


Fig. 4 16号溝出土陶磁器



16号溝近景



17号溝近景

② 中世の遺構・遺物

本年度の調査区の拡張と掘り下げによって、中世館（屋敷地）跡の新たな施設（溝、井戸など）を発見するとともに、これに先行する中世の遺構を確認することができた。以下、それぞれを簡単に紹介する。

中世館（屋敷地）跡 昨年度までの調査で、掘立柱建物・柵列・井戸・墓（屋敷墓）・土坑およびこれらの諸施設を囲郭する溝を確認していたものである。時期は15世紀後半から16世紀前半前後に位置づけられる。今回の調査区の拡張によって、新たに溝の南東コーナーと南辺溝、柱穴群、井戸1基を検出した。

新たに検出した南辺溝は、上面幅0.7～1.5m、延長59m、深さ0.2～1.0mを測る。埋土からは土器類、銅銭、石臼、石塔台座等が出土している。これによって、中世館（屋敷地）は一辺約60mの略方形を呈する溝によって囲郭されていたことが判明した。ただ館（屋敷地）の南西コーナーでは溝が途切れており、この付近が出入り口であった可能性を予測させる。

溝の出土遺物 (Fig. 5) 溝の出土遺物の中で、時期的な指標となるものを数点紹介する。1は腰折れの青磁皿である。残存部分に劃花文などの文様は認められない。2は小型の染付皿で、底部は萐筍底となる。内底部にはアラベスク花文が認められる。3は手ズクネ手法による土師質土器の坏口縁部である。4は瓦質土器の火舎である。2条の突帯の間に巴文のスタンプを有する。5は備前系の摺鉢で、内面には8～12条を一単位とする櫛歯を有する。これらの資料は、いずれも15世紀後半から16世紀前半前後に比定される。

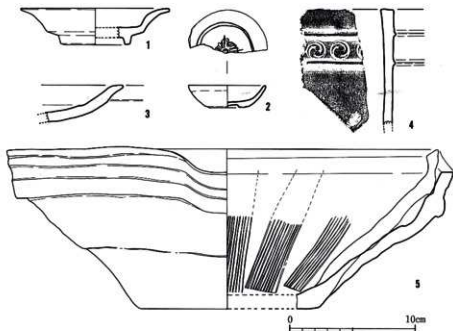


Fig. 5 館（屋敷地）の溝出土遺物

C区6号井戸 館（屋敷地）

南東部に検出した素掘りの井戸である。直径は1.6mを測る。検出面より3.7m程掘り下げたが底面を検出できず、これ以上の掘り下げを断念した。埋土中より、土器類・土錘・石塔笠・鉄器・漆器碗破片などが出土している。この井戸も館（屋敷地）の存続時期と重なる井戸のひとつである。

館（屋敷地）形成以前の遺構

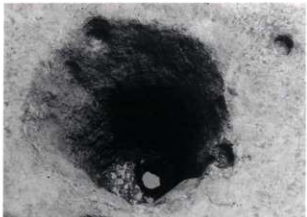
今回の調査区の掘り下げによって、館（屋敷地）の遺構面の下層に、中世の時期幅に位置づけられるが、それより明らかに先行する時期の柱穴群・井戸などを検出した。個々の検討が不十分であり、詳細な時期の決定は出来ていない。検出した遺構は、井戸2基、墓1基および柱穴群である。

C区3号井戸 調査区のほぼ

中央部に検出した素掘りの井戸である。直径は1.9mを測る。検出面から約2.5m掘り下げた所で、竹で編んだザルを発見した。竹ザルは平面形が楕円形を呈し、長径35cm短径30cm、深さ5cmを測る。保存状態は比較的良好であるが、底面を欠損している。なお、井戸の底面は検出していない。出土遺物に中国産の口禿げ白磁破片や瓦質土器を認めており、14世紀以降に比定できる可能性が高い。



6号井戸（館の時期と重複）



3号井戸（館形成以前）



3号井戸出土竹ザル

③古墳時代中期・後期の遺構・遺物

古墳時代中期、後期に比定できる遺構には溝Ⅱ・溝Ⅴと流路がある。溝Ⅱ・溝Ⅴは今回の調査によって新たに検出されたもの、流路は一昨年調査で確認されたものの延長部である。

溝Ⅱ 調査区北側で検出された幅2.5m、深さ60cmの二段掘りの溝である。現在延長30mを確認している。水流の方向は北側と思われ、南側は流路と接続する。埋土上位より完形品の土師器甕・高坏、中位よりミニチュア土器が出土しており、5世紀後半代に比定されるものと思われる。またこの溝が流路と接続することから、流路の上限年代が5世紀後半代にまで遡ることを示唆している。

出土遺物(Fig. 7) 1はミニチュア土器で、粘土帯の折り返しによって口縁部を形成するものである。内外面には指頭によるわずかな凹みが認められる。2は土師器甕である。口縁部内外面、胴部外面はナデ、胴部内面上半は横方向、下半は縦ないし斜め方向のヘラ削りを施す。甕としては小型のもので、外底部は赤変しており、口縁部外面の一部と胴部外面にはススの付着が認められる。3は土師器高坏で、口縁部と脚部がラッパ状に開く器形を呈する。調整は内外面とも刷毛目を主体とするが、脚部内面にはシボリ痕が認められる。脚部内面下位には甘い稜線が認められ、シボリ痕と刷毛目調整の境となっている。

その他、図示していないが土師器甕の口縁部破片が1点出土している。なお、今のところ出土遺物は土師器のみで、須恵器の出土は認められない。



溝Ⅱ近景

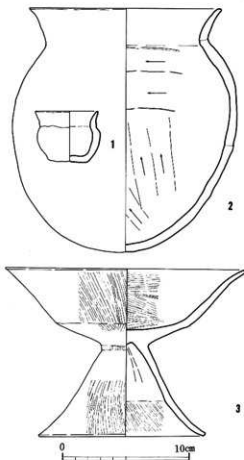


Fig. 7 溝Ⅱ出土遺物

流路 今回の調査で、約100mを検出した。これによって、一昨年の調査を含め約175mを確認したことになる。流路は調査区南側から緩やかに北側へと流れ、その延長部がD区で検出されている。流路の幅、深さは場所によって異なるが、上面幅3.0-6.0m、深さ10-80cmを測る。埋土は基本的に粗砂層と細砂層、あるいはシルト層などの互層によって構成され、流水のあったことを示している。また洪水で埋積されたと推定される堆積状況を示す部位もある。流路の埋土中からは、5世紀後半と7世紀前半前後を主体とする多量の土器類が出土している。昨年までの調査所見では、時期判定の根拠となる須恵器が主として5世紀末と7世紀前半前後のもので、その中間の時期のものが認められなかったこと、流路底面より7世紀前半前後の土器、上面および埋土中より5世紀後半代の土器が出土したことから、流路の形成時期は7世紀前半前後で、5世紀代の遺物はすべて流れ込みと解釈していた⁽¹⁾。ところが今回の調査によって、量的な多寡はあるものの5世紀末から7世紀中葉までのほぼ全時期にわたる須恵器の出土が認められたこと、5世紀後半に比定される溝IIが流路に接続していることなどが判明し、流路は5世紀後半から7世紀中葉前後まで継続して機能していたと解釈するのが妥当と考えるに至った。ただやはり流路に大幅な改修を加えた時期は7世紀前半前後と思われる。また一昨年度調査のB区や本年度調査のD区の流路最上面から、宝珠ツマミを持つ須恵器の壺が出土しており、流路の最終埋没時期が7世紀中葉前後に比定されることが判明した。

出土遺物 (Fig. 8・9) Fig. 8-1-4は須恵器坏身である。1は受部径9.4cmを測り、底部はヘラ切り未調整である。中村浩氏による陶器編年の第II型式6段階に比定され、7世紀中葉前後に位置づけられる。2は復元受部径9.7cmを測る。たちあがりは高いが、端部の稜は甘い。小片のため、復元口径値にやや誤差を生じている可能性がある。第I型式5段階から第II型式1段階に比定され、5世紀末から6世紀初頭に位置づけられる。3は復元受部径11.4cmを測る。口縁端部には鋭い稜線を有する。第II型式1-2段階に比定され、6世紀初頭から前半に位置づけられる。4は口径12.2cmを測る。たちあがりは低く、底部には回転ヘラ削りを施す。第II型式4段階に比定され、6世紀末から7世紀初頭に位置づけられる。5は須恵器坏蓋で、天井部には回転ヘラ削り、口縁部と天井部の境および口縁端部には沈線状の段を有する。また天井部外面には、ヘラ記号が認められる。第II型式2-3段階に比定され、6世紀中葉前後に位置づけられる。6は須恵器短頸壺の蓋である。天井部はヘラ切り未調整で、外面にはヘラ記号が認められる。7世紀前半から中葉に比定されるものである。7は須恵器甕の口縁部である。外面には櫛描き波状文を有し、中位に1条の突帯を有する。その他、須恵器には内面の同心円叩きを擦り消すものなども出土しており、量的な多寡はあるものの、5世紀後半から7世紀中葉前後に渡るすべてのものが検出されていることに注意すべきである。

8-10は土師器坏である。8は口縁が外反し、内外面ともナデ調整を施すもの。9は口縁が内湾気味に直立し、底部に刷毛目調整を施すもの。10は内外面に指頭痕が認められ、やや粗雑

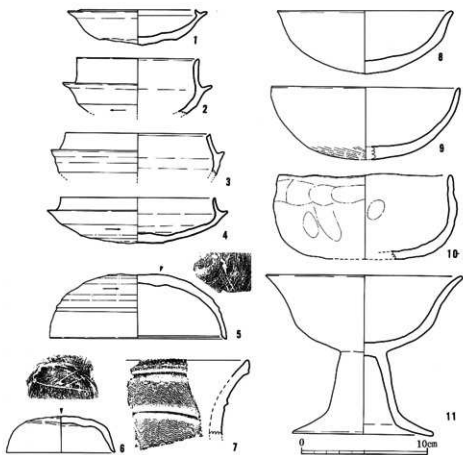


Fig. 8 流路出土遺物

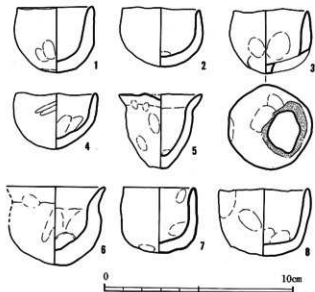


Fig. 9 流路出土ミニチュア土器

な感を呈するものである。11は土師器高坏である。器表面が磨滅しており、詳細な調整は明らかでないが、ナデを主体とするものと思われる。

Fig. 9-1~8は、流路出土のミニチュア土器である。形・大きさともバリエーションがあるが、1-4のような器形を呈するものが目だつ。3の底部の穿孔は、意図的なものである可能性がある。ミニチュア土器は2~3個がまとめて出土することがあるが、原位置を保つものとは

思われず、流路全体に散在的に検出されるのが普通である。図示したものはすべてではなく、他にも十数個体のミニチュア土器が出土している。水に対する祭祀に関連する遺物と考えられるものであろう。

溝V 調査区北東隅で新たに検出した溝である。現在約21.6mを検出しており、上面幅4m、深さ約1.1mを測る。流路と接続しているが、溝Vの底面のレベルは流路のそれよりかなり低い。埋土は、下位の粗砂を含む砂質土、中位の褐色粘質土、上位の細砂層の大きく3層に分層される。下位の砂質土には流木を多量に含み、かなり大規模な洪水が起こった可能性を示唆している。中位の褐色粘質土はこの洪水発生後の



溝V全景

溝の2度目の底面である可能性が高いが、さらなる調査の進行を待って最終的な結論を下したい。溝は調査範囲内の中で蛇行する部位が認められ、この部分にやや多量の流木・木片が認められる傾向があった。そのため、調査当初この部位を木材の貯蔵に関連する施設である可能性を考えていたが、これも結論を出せなかった。流路上位からの遺物は少ないが、下位より流木、土鍾、ミニチュア土器、土師器、須恵器の小片が出土している。時期判定の基準となるものは、流路下位よりたちあがりの低い須恵器坏身の口縁部等が出土しており、溝Vの形成時期が7世紀前半前後に求められることを示している。埋土中の流木・木片には、加工痕のあるものや板材、および杭の基底部等も認められる。

註 (1)「植田市遺跡」Ⅱ

(1989年 大分県教育委員会)
24～25頁

(2) 中村浩『和泉陶器窯の研究』
(1981年)

村上久和・吉田寛・宮本工
「豊前における初期瓦の様相」
『古文化談叢』第18集 1987年



溝V調査風景

④古墳時代前期の遺構・遺物

溝Ⅰ・溝Ⅲ 溝Ⅰは一昨年の調査で、「弥生流路」として報告した遺構の延長部である。今回約91mを確認し、合計約120mを調査したこととなる。溝Ⅰは調査区南側から北側へと縦走し、中央部付近でやや湾曲する。その断面形はかなり整備された二段掘りを呈し、上面幅2.0~2.5m、深さ90cm前後を測る。埋土中からは多量の土器類が出土するが、完形品や大型破片は一昨年調査のB区に多く、今回調査のC区では小型の破片と少量の完形品を認める程度である。溝Ⅲは上面幅1.2m、深さ20cmの小規模な溝である。後世の遺構から部分的に擾乱を受けており、全体像がいまひとつ明かでない。出土遺物から両者とも古墳時代前期の早い段階に位置づけられる。



溝Ⅰ近景

溝Ⅰ、溝Ⅲの性格であるが、これが果して灌漑や耕作に伴うものであるか、あるいは居住施設の一部であるのか、明確な判断を未だなし得ていない。今後の調査に期すこととしたい。

出土遺物 (Fig.10~12) Fig.10は溝Ⅰから出土した滑石製の勾玉である。腹部に鋭い金属でえぐったような面取りがあり、そのため断面が丸くならず、特徴のある断面形となっている。特徴的な形態の勾玉で、県下では舞田原遺跡8号住居跡⁽¹⁾、草場第二遺跡184号土墳墓・13号方形墓第1主体部⁽²⁾に例があり、他では福岡市老司古墳⁽³⁾に類例がある。さらに類例を探索中であり、詳細は正式報告に期したい。

Fig.11-1は溝Ⅲ出土の複合口縁壺である。溝Ⅲからは他に胴部に三角突帯を持つ壺の破片も出土している。Fig.11-2~9・Fig.12-1~4は溝Ⅰ出土土器である。今年度の調査資料のみでは、溝Ⅰの時期を十分示し得ないことから、一昨年調査のB区の資料も掲げている。

Fig.11-2は口縁部に崩れた波状文を持つ複合口縁壺である。3・4は中型の甕で、底部は尖底状になる。内面に削りは認められない。5は小型の甕で、外面には指頭痕が認められる。6は小型丸底壺で、内外面ともナデ調整を施す。7は小型の畿内系二重口縁壺で、口縁内外面はナデ、頸部と胴部外面には刷毛目調整を施す。8・9は高環である。8は環部が二段に屈曲するもので、内面には一部刷毛目が認められる。9は口縁部と脚部がラッパ状に開くもので、環部には刷毛目調整を施す。

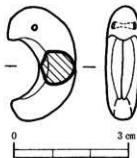


Fig.10 溝Ⅰ出土勾玉

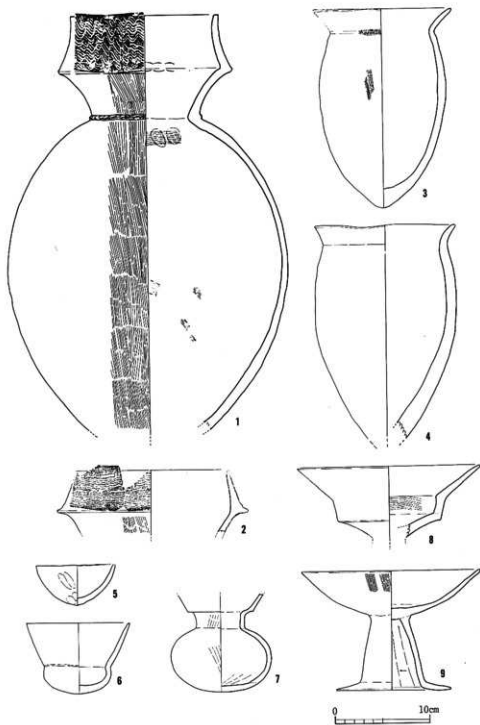


Fig.11 溝Ⅲ・溝Ⅰ出土遺物

(1.溝Ⅲ 2~7.C区溝Ⅰ 8・9. B区溝Ⅰ 87年度調査)

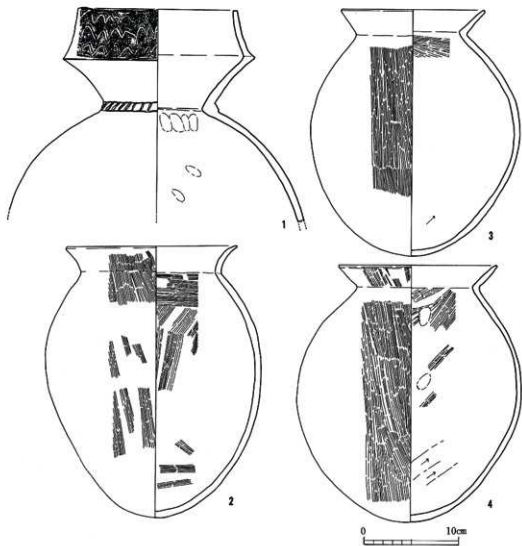


Fig.12 B区溝I出土遺物 (87年度調査)

Fig.12-1は複合口縁壺である。口縁外面には櫛描き波状文を有し、頸部には刻目突帯を巡らす。2～4は甕。2はやや長胴気味の器形を呈する。内外面とも刷毛目調整を主体とする。3・4は胴部が丸みを帯びる器形となるものである。いずれも外面に刷毛目を有し、内面は削りを行った後で刷毛目、さらにはナデ調整を施す。以上の土器は、いずれも布留式古段階の特徴を示すものであろう。

- 註 (1) 清水宗昭ほか『舞田原』(大飼町教育委員会 1985年) 117～118頁
 (2) 高橋徹『草場第二遺跡』(大分県教育委員会 1989年) 146・218頁
 (3) 福岡市教育委員会『老司古墳』(1989年) 103頁

(3) D区の調査

本年度新たに設定した面積約300㎡の調査区である。既調査で検出された遺構の広がりをつかみ、来年度以降の調査の参考とするために設定したトレンチであったが、遺構検出の後、余力があったので精査を行った。

調査の結果、C区で検出した流路とそれに接続する溝の延長部が検出されている (Fig.14)。他にも溝やピット、土坑などが検出されているが、出土遺物が僅少なため詳細な時期が確定できていない。

流路は調査区北東側で、一方の肩部を検出した。検出した長さは約25mで、さらに調査区外に延びる。流路より新しい時期に比定される溝2条と切り合い関係を有するが、これらの溝の詳細な時期は不明である。遺物の出土量は僅少であるが、流路の埋土最上からは7世紀中葉前後に比定できる須恵器の蓋が出土しており、流路の最終埋積時期を示す上で示唆的な遺物である。

流路に付属する溝は、調査区西側で発見された。断面形は二段掘りとなり、上面幅約2.4m、深さ約0.5m、溝の幅約1.1m、深さ約0.3mを測る。調査区内では長さ約6mを検出した。この溝の延長部はC区内でも認められ、そこでは流路との接続部を検出している。出土遺物は土師器の破片数点が認められたに過ぎない。

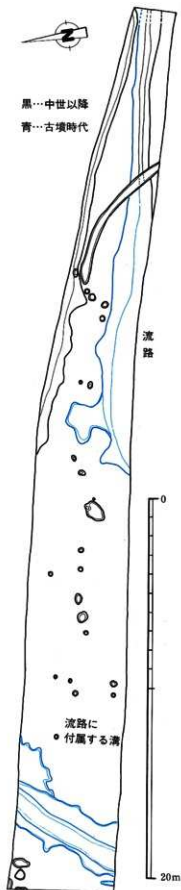
出土遺物(Fig.13) Fig.13は須恵器の蓋で、流路の埋土最上から出土したものである。復元口径10.2cm、現存高2cmを測る。天井部にはツマミが剝離した痕跡と回転へラ削りが認められる。色調は青灰色を呈し、胎土には石英小粒を含む。焼成は良好である。

7世紀中葉前後に比定される典型的なもので、流路の最終埋積時期を示すものと思われる。



Fig.13 流路出土須恵器

Fig.14 D区全体図 (s=1/200)



III. まとめと今後の課題

今回の調査で、昨年度までの調査所見に若干の変更・修正を加えなければならない箇所が出てきた。それらは①古墳時代の流路の継続時期、②中世館（屋敷地）跡の規模、③「弥生流路」として報告した遺構の時期と名称の変更の3点である。これらは本文中で既に触れたが、本項目で再度確認するとともに、若干の関連する問題を書き加えて今回のまとめとしたい。

(1) 古墳時代の流路について

前述の通り、昨年度までの調査所見では流路埋土中より検出された土器が5世紀末と7世紀前半前後のものにはほぼ限られ、加えてこれらが層位的に混在もしくは逆転して出土したことから、流路は7世紀前半前後に形成され、5世紀代の遺物はすべて流れ込みと考えていた。これには流路の周辺で、5世紀後半代の住居跡・土坑などの居住遺構が見つかったことも影響していた。

ところが本年度、5世紀後半代に比定される溝Ⅱが検出された。この遺構は流路と明確な切り合いが認められたにもかかわらず、流路を越えて南側には延びず、流路を主水源として導水する溝と考えるのが妥当である。また今回の調査によって、量的な多寡はあるものの流路埋土中より5世紀後半から7世紀中葉までのほぼ全時期にわたる須恵器の出土が認められたことなども考え合わせると、流路は5世紀後半代から7世紀中葉頃まで継続して機能していたと解釈するのが最も妥当であろう。流路の機能の終焉は、D区などで検出された須恵器の年代⁽¹⁾から7世紀中葉前後に求められる。

さて、一昨年度の概報で流路は性格の異なる3つの溝で構成されることを指摘した⁽²⁾。すなわち、①小規模な自然河川を改修し、絶えず水流があったと思われる「流路主流」、②流路主流に接続し、クイ列等によって水流を調整したと思われる「溝」、③流路主流に接続し、おもに排水の役割を果たしたと思われる「排水溝」である。このように整備された流路の姿は、溝や排水溝より出土した遺物から、やはり7世紀前半前後の所産と思われ、当該期に大規模な流路の改修があったことが推定される。層位的に混在もしくは逆転して出土する遺物の出土状況も、上記のことを傍証している。そしてこれらの整備された溝のあり方は、生産面としての水田経営を当然予測させるものである。

以上の記述の内容を妥当なものとする、植田市遺跡における流路の使用状況から考えた沖積地開発には、5世紀後半と7世紀前半の2つの画期が存在することが予想される。これについては、植田市遺跡周辺における御陵古墳⁽³⁾を盟主とする5世紀後半代の群小古墳のあり方や7世紀前半代を主体とする横穴墓群のあり方と無関係ではないと考えるが、この課題については正式報告に期すこととし、今後も調査を進めてゆきたい。

(2) 中世館（屋敷地）跡について

中世館（屋敷地）跡については、今年度の調査で新たに南辺溝・井戸・柱穴等の施設を発見した。これによって、穂田市遺跡における中世館（屋敷地）跡は一辺約60mの溝で囲郭されたものであることが明らかになった。館（屋敷地）跡の諸施設を再度確認しておきたい。溝は南辺約59m、東辺約52m、北辺約65m、西辺約45mを測り、南西コーナー部分は溝が館の内側に屈曲する。この部分は出入口となるものと推定される。溝の内側には掘立柱建物8棟、井戸2基、墓3基、その他土坑などの施設が検出されている。

室町時代後半期—15・16世紀—に限定して、大分県下の既調査の居館あるいは溝を有する屋敷跡の規模を比較したものが、Fig. 15である^(1,4)。調査が不十分で全容が判明している例は少ないが、一見して、a、空堀・土塁等の施設を有し、溝・堀の一辺の長さが100mを越えるものとb、溝の規模が小さく、一辺の長さが60—80m前後のもの2つの類型が存在することがわかる。aの類型に属する大友館⁽⁶⁾・一万田館⁽⁶⁾は、言うまでもなく該期の戦国大名大友氏の関連遺跡であ

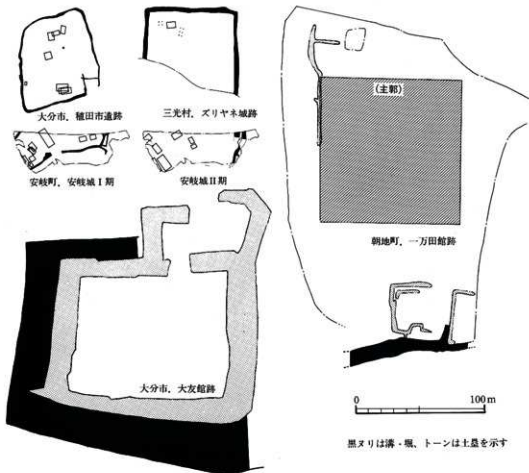


Fig. 15 中世館（屋敷地）の大きさ比較（大分県 15・16世紀 S=1/3,000）

り、居住遺構としては当地において最も上位にランク付けできるものである。bの類型に属するズリヤネ城⁽⁷⁾は、豊前地域の守護職である宇都宮氏の庶家の一人である深水氏との関連が考えられ、武士階級ではあるが、当地の土豪クラスの居住遺構である。

穂田市遺跡の居住遺構もbの類型に位置づけられ、県下の調査例ではズリヤネ城の規模と最も近い。ただし注意すべきことは、ズリヤネ城が台地上に立地するのに対し、穂田市遺跡は沖積低地に位置することである。a・bの類型に属する武士・土豪階級の居住遺構がいずれも台地上に立地することと対照的に考えれば、沖積低地に立地する穂田市遺跡の館(屋敷)の居住者には、土豪や被官・上層農民クラスまで底辺を広げた階層を考慮しておかねばならない⁽⁸⁾。

いずれにせよ以上の見解は、前年度までの調査所見と抵触するものでなく、また①館(屋敷地)の存続時期が15世紀後半から16世紀前半を主体とすること、②館(屋敷地)の廃絶年代が穂田氏の衰退年代とほぼ一致することから、館(屋敷)の居住者は当時の穂田荘内における穂田氏の動向と軌を一にする者であった可能性が高いこと、という見解にも変更を加える必要はないと考える。今後も検討を続けたい。

(3) 古墳時代前期の遺構と関連する問題

今回報告した溝Iは、一昨年度の概報で「弥生流路」として報告した遺構の延長部である⁽⁹⁾。溝の埋土中からは、ややまとまった量の土器が出土している。土器の大半は、当地の弥生時代後期以来の在地的な壺・甕を主体とするものであるが、その中に典型的な小型九底壺(Fig.11-6)や茶臼山型と称される二重口縁壺(同7)とが見い出された。特に後二者は布留式に特徴的なもので、これをもって当該遺構の年代を古墳時代前期(豊後Ⅶ期併行期)に訂正する必要が出てきた。穂田市遺跡の溝I出土遺物と類似または前後する段階に位置づけられる近隣地域の一括出土遺物としては、大分市守岡遺跡19号住居⁽¹⁰⁾跡・同浜遺跡I区3号石棺第1土器群・同E-A1区第3土器群・同D-O1区第7土器⁽¹¹⁾群・大岡町舞田原遺跡29号⁽¹²⁾穴などが掲げられる。

当地域における当該期の土器編年は、1979年における高橋徹・村上久和の共同作業、1980年における羽田野光洋の整理、あるいはそれらを補強する1983年の小柳和宏の作業によってほぼ完成をみている⁽¹⁴⁾。さらに近年、これらの作業案をさらに細分する編年案も提出されている⁽¹⁵⁾。これらの細分案は、一括資料相互の比較から土器の個別的で微細な新古の特徴を抽出し、これを縦に並べる方法論を採用しており⁽¹⁶⁾、これによって当地における土器の微細な変化が明らかにされつつある。ただし、ここではこれらの細分案に立ち入らずに、弥生時代後期以来の伝統的な複合口縁壺を主体とする土器のセットの中に外来系である布留式系統の土器が出現する段階があることを認識し、この段階でも在地系の複合口縁壺は、属性レベルにおいても外来系土器の影響をほとんど受けずに存続することが確認できればよい。穂田市遺跡の溝I出土土器は、まさにこの段階に位置づけられる⁽¹⁷⁾。

さて、穂田市遺跡の北西約1.2kmに「雄城台」と呼ばれる台地がある。この台地上には、弥生時代前期以来の集落遺跡である雄城台遺跡⁽¹⁸⁾が立地する。そして弥生時代後期末前後になると、集落を囲うと思われる大規模な溝の中に大量の土器を廃棄するに至る。ここに見られる土器の大量廃棄という行為は、大分平野における当該期の弥生集落に頻繁にみられる事象である。雄城台遺跡で紹介された土器資料は極く僅かであるが、おそらくは豊後V期併行期に位置づけられるものであろうと思われる。雄城台遺跡溝状遺構出土の土器資料と穂田市遺跡溝I出土の土器資料とを相互に比較すれば、後者は前者より一段階新しい時期か直後の段階に比定される。雄城台遺跡と穂田市遺跡が非常に近接した距離に存在すること、前者が台地上に、後者が沖積低地上に位置すること、また後者が一段階新しい時期に比定されることなど、両遺跡の関係は興味深いものがある。そして両者の関係は、①大分平野における環溝集落の様相、②土器の大量廃棄、③鏡片の廃棄などに象徴される当地域の弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての変化と密接に関係すると思われるが、詳細は正式報告に期したい。

以上の記述をもって、今回はまとめとしたい。今回も、まとめの内容について多大な御教示を得た飯沼賢司・小柳和宏・坂本嘉弘・高橋徹・玉永光洋・坪根伸也・宮内克己・村上久和・綿貫俊一の諸氏に謝意を表する次第である。

註(1) 須志器の年代観に関しては、以下の文献参照。

- 村上久和・吉田寛・宮本工「豊前における初期瓦の一様相」(『古文化談叢』第18集 1987年)
- (2) 渋谷忠章・吉田寛編『穂田市遺跡』I (大分県教育委員会 1988年) 18頁
- (3) 小田富士雄ほか『御陵古墳緊急発掘調査』(大分県文化財調査報告第24輯 1972年)
- (4) 埋蔵文化財研究会・(財)大阪市文化財協会「中世末から近世のまち・むらと都市」第5分冊(1990年)「大分県」629～690頁参照。
- (5) 佐藤興治「歴史遺構を探る」(『大分市史』中巻 1987年)
- (6) 後藤一重編『朝地地区遺跡群発掘調査概報』I (朝地町教育委員会 1985年)
宮内克己編『朝地地区遺跡群発掘調査概報』III (朝地町教育委員会 1988年)
宮内克己編『朝地地区遺跡群発掘調査概報』IV (朝地町教育委員会 1989年)
宮内克己「一万田館跡」(『大分県地方史』第137号 近刊)
一万田館跡については、宮内克己氏より詳細な御教示を得た。
- (7) 村上久和ほか「ズリヤネ城跡」『三光村の遺跡』(三光村教育委員会 1989年)
- (8) 須田茂氏は群馬県下における溝・堀を有する居住遺構の規模を検討する中で、方一町四方のものを郷領主層の居館、70～80mの二重堀の構えを豪邸クラス、方50m程のものを有力農民層(在家)の屋敷とする。対象地域を異にしたものであるが、穂田市遺跡の居住遺構の性格を考える上で参考となるものである。須田茂「有力農民の屋敷—新田荘・東田遺跡—」(『よみがえる中世』5 浅間火山と中世の東国 1989年 平凡社 182-183頁)
- (9) 註(2) 文献参照。 23頁
この時点では遺構の位置づけを「豊後V期」とした。後述するように「豊後VI期」に訂正をしたい。
- (10) 伊達宗泰・森浩一「土器」(『日本の考古学』V 古墳時代(下) 1966年)
九州地方におけるこの種の二重口縁壺の集成と編年が、蒲原宏行によって行われている。これに従うとすれば、穂田市遺跡の資料は3期に位置づけられ、寺沢薫による布留1式併行期に比定される。

- 蒲原宏行「北部九州出土の畿内系二重口縁壺—その編年と系譜をめぐって—」(『古文化誌』第20集 1989年)
- 寺沢薫ほか「矢部遺跡」(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊 奈良県立橿原考古学研究所 1986年)
- 01) 羽田野光洋ほか「守岡遺跡—昭和50・51年度発掘調査概報—」(大分県教育委員会 1979年)
- 02) 真野和夫ほか「浜遺跡」(大分県文化財調査報告第48輯 大分県教育委員会 1980年)
- 03) 栗田勝弘・城戸誠ほか「舞田原」(大分県教育委員会 1985年)
- 04) 高橋敏「廃棄された鏡片—豊後における弥生時代の終焉—」(『古文化誌』第5集 1979年)
羽田野光洋「二本木・松木遺跡を中心とした出土土器の編年(案)」(『大野原の遺跡』大分県教育委員会 1980年)
小柳和宏「土器の編年(古式土師器を中心にして)」(『楠野』大分県文化財調査報告第63輯 大分県教育委員会 1983年)
- 05) 坂本嘉弘「まとも」(『高浜台地の遺跡』千歳町教育委員会 1989年)
玉永光洋「大溝出土土器群の時期幅について」(『安国寺遺跡』大分県・国東町文化財調査報告書第4集 国東町教育委員会 1989年)
- 06) 当該期の土器編年に関する問題は、下記の文献に指通されている。
岩永省三「土器から見た弥生時代社会の動態」(『横山浩一先生退官記念論文集Ⅰ 生産と流通の考古学』1989年)
- 07) 複合口縁壺においては、帯状突起が胴部下位から上位へ移行することや胴部の球形化等の傾向が指摘されているが、これらは外来系土器の影響ではもちろんない。
- 08) 高橋信武ほか「雄城台—第8次発掘調査の概要—」(大分県教育委員会 1987年)

【補記】 調査も終盤に近づいた

1990年2月5日、溝Ⅰより木器の組合せ鋤1本が出土した。出土位置は、C区西側の流路と溝Ⅰが重複している部分である。空撮終了後、流路の床面を掘り込み、溝Ⅰの埋土を掘り下げていた途中で鋤を発見した。鋤は溝Ⅰの床面から約15cm浮いた状態で検出された。刃部長36cm、刃部幅14cm、中央部



溝Ⅰ出土組合せ鋤

に3.5×5cmのほぞ穴を持ち、柄を装着するための長さ6cm、幅2cmの突起を有する。この形態の組合せ鋤は、水田の水切りのための溝の掘削や溝の掘り直しという作業に適している。溝Ⅰの掘り直しか溝さらえの作業に関係した道具のひとつとも考えられる。前述の通り、溝Ⅰは布留式古段階に比定され、当該期の木器としては県下初例のものとなろう。詳細は正式報告に期したい。

植田市遺跡Ⅲ

七瀬川河川改修工事に
伴う発掘調査概報

1990. 3. 31

大分県教育委員会
印刷 明治印刷株式会社
宇佐市大字長洲597